http://hokkaido-poland.com/pole.html

POLE

北海道ポーランド文化協会会誌「ポーレ」

第９号　1989, 11, 2

発行
北海道ポーランド文化協会
〒060　札幌市中央区北２西２
道特会館　ＮＤＡ画廊内
電話　221-8672

北海道ーポーランド文化協会
総会開かれる

北海道ポーランド文化協会の総会が、去る十月十六日午後六時三十分より、札幌市中央区のすみれホテルで約四十名の会員を集めて行われた。総会では今村会長の挨拶のあと、一九八八年度（一九八八年十月から本年九月までの年度）の事業・決算報告および監査報告があり了承された。ついで新年度の役員（次ページの表を参照）が選出された．最後に、一九八九年度の事業計画と予算案が提案され、賛成多数で了承された。

総会に引き続いて小林暁子さんの司会で懇親会が開かれた。まず、横道朋子さんによるショパンの「マズルカ」、真光孝美さんによるシマノフスキーの「主題と変奏」のピアノ演奏がおこなわれ、参加者に深い感銘を与えた。ついで、熊倉ハリーナさんによってポーランドの詩の朗読が行われた。副会長の遠藤道子さんの挨拶のあと、札幌在住のポーランド人とその家族を交えてなごやかな雰囲気の中で会食が行われた。最後に監査の片波見雅夫さんの挨拶があり、午後九時前に盛会のうちに閉会した。

総会に提出、了承された議案の主な内容は以下の通りである。

一九八八年度の事業

総会・懇親会の開催　十月二十四日（すみれホテル）

例会（四回開催）

◆第五回例会　五月二十七日
「ポーランド映画の世界」第一回、アンジェイ・ワイダ監督「地下水道」上映（解説＝伊東孝之）

◆第六回例会　七月二十二日
講演会、「ポーランドにおける選挙――今後の見通し」、講師＝ワルシャワ大学教授　イェジ・トマシェフスキ氏

◆第七回例会　八月三十日
ヤドヴィガ・ロドヴィッチ氏を囲む懇談会、「ポーランド舞台女優と語る」

◆第八回例会　九月三十日
「ポーランド映画の世界」第二回、ヴォイチェフ・ハス監督「人形」上映、（イメージ・ガレリオ共催）
ポーランド講習会開催

◆第一回　五月九日より十週間、講師＝ガジミュシュ・コゲト氏、受講者＝十五名

◆第二回　九月五日より十週間、講師＝熊倉ハリーナ氏、受講者：十七名

会誌ポーレ発行（五回）
第五号（二月十六日）、第六号（四月二十九日）、第七号（七月四日）、第八号（八月九日）

運営委員会開催（三回）
三月十六日、六月二十一日、八月二十三日

一九八八年度の決算

【収入の部】

会費収入	
個人会員	四四一、〇〇〇円
団体会員	二一〇、〇〇〇円
その他	一〇、二〇〇円
小計	六六一、二〇〇円
繰越金	一七〇、五八四円
仮受け金	一〇四、四〇〇円
合計	九三六、一八四円

【支出の部】

事業費	三七三、二四五円

連絡費　八二、二四〇円
会議費　一一六、〇五六円
事務費　五三、九三八円
小計　六二五、四七九円
仮払い金　七二、一〇〇円
繰越金　二三八、六〇五円
合計　九三六、一八四円

新年度の事業計画

（一）音楽会、美術展、映画会、講演会等の例会開催、あるいは行事の後援
（二）ポーランド語講習会の開催
（三）協会誌「ポーレ」の発行（四回を予定）
（四）その他

新年度の予算

【収入の部】
会費収入
個人会員　四四〇、〇〇〇円
団体会員　一八〇、〇〇〇円
その他　一〇、〇〇〇円
小計　六三〇、〇〇〇円
繰越金　二三八、六〇五円
合計　八六八、六〇五円

【支出の部】
事業費　三二〇、〇〇〇円
連絡費　八〇、〇〇〇円
会議費　一二〇、〇〇〇円
事務費　六〇、〇〇〇円
予備費　五〇、〇〇〇円
小計　六三〇、〇〇〇円

ポーランド―日本協会の活動

日本週間のプログラム

ポーランドのウッジ市では、元ウッジ工科大学学長のクロー教授と吉田正勝氏を中心とするポーランド・日本協会の活動が活発に行われています。その一例として、一九八五年に行われた日本週間のプログラムを紹介します。

＜日本週間プログラム＞

共催・後援
ウッジ県文化協会連合
国立ウッジ考古学・民族博物館
在ポーランド日本大使館

◆十二月四日（水）　オープニング
開会式
日本歌曲合唱紹介（ウッジ市民コーラス「エコー」）
記念講演「日本の宗教としての神道」W・コタニスキー教授（ワルシャワ大学日本学科）
日本紙幣展、和紙とおり紙展
おり紙教室、書道教室修了生修了証授与式
記念映画会「野麦峠」（日本大使館提供）

◆十二月五日（木）
講演「日本建築について」K・ストロベイコ（ワルシャワ工科大学）
映画会「またぎ」（日本大使館提供）

◆十二月六日（金）
講演「日本文学について」A・ザレフスカ（ポ日協会ウッジ支部）
日本文学ポーランド語訳鑑賞会
ビデオ「地獄門」芥川竜之介原作

◆十二月七日（土）
日本武道実技紹介
剣道（ウッジ剣道クラブ）
合気道（シチェチン合気道クラブ）
柔道（ウッジ剣道クラブ）
弓道
ビデオ「空手」「忍者」

◆十二月八日（日）
公開おり紙講座
講演「文楽―日本の人形劇について」W・ボランスキー（ウッジ人形劇場）

一九八九年度役員名簿

会長　今村成和
副会長　遠藤道子
運営委員　伊東孝之
大竹貞
大井清美
小笠原正明（会計担当）
小林暁子
霜田千代麿
灰谷慶三
長谷川洋行
藤原勲夫
本間富雄
布施英憲
三澤正博
和田完
監査委員　片波見雅夫
森田憲
事務局長　吉田宏

ポーランド・クロニクル

一九八九年 六月～九月

＜作成＞ 伊東孝之

（一九八九年九月十八日）

【六月】

六月二一日

◆オジェホフスキ党政治局員が『朝日新聞』とインタビュー。政党法を制定し、「連帯」議員団の政党活動を認める。九一年に開催予定の党大会を繰り上げて年内にも開き、新しい綱領を採択、「新しい党」として発足させる。政治的決定の場を議会に移す、などの考えを示唆する。

六月二六日

◆「連帯」会派は「市民議会クラブ」と名乗り、大統領候補を立てないことに決定。

六月三〇日

◆党一三中総開催（～七月一日）。ヤルゼルスキが大統領選挙立候補を断念し、代わりにキシチャク内相を推薦して大騒ぎとなる。

◆ブッシュ米大統領、ポーランド記者団との会見でポーランド駐留ソ連軍の全面撤退を要求。

【七月】

七月はじめ

◆A・ミフニクが『選挙新聞』に「大統領は諸君に、首相はわれわれに」という巻頭論文を掲げて、政府与党からだけでなく、「連帯」内からも批判を浴びる。のちに首相となるマゾヴェッキも批判的であった。

七月二日

◆ポーランド当局、議員宣誓文のなかの「社会主義」を削除することに同意、「連帯」に譲歩する。

七月四日

◆市民議会クラブ会長のB・ゲレメクが、『朝日新聞』とのインタビューで、「市民議会クラブはキリスト教民主主義、社会民主主義、自由主義の三つの異なる要素からなる。政党よりも社会のさまざまな思想を代表する人々が集まる政治クラブの方がよい。経済情勢の悪化から数カ月以内にも社会不安が起こることを恐れている。そうなれば民主化の願いも吹き飛ぶ。西側の援助がなければ改革はテイクオフできない。ポーランドだけではなく、ゴルバチョフの政策と東欧全体の将来がかかっている」と訴える。

七月五日

◆選挙後初の議会を召集。

◆パリでゴルバチョフソ連共産党書記長、ワレサ議長のソ連訪問には何の障害もないと語る。

七月六日

◆米大統領ブッシュ、「連帯」から一〇〇億ドルの援助要請を受けたことを明らかにし、これを現実離れしていると評する。

七月七日

◆値上げ、ガソリン四〇％、砂糖六六％、タバコ八三％、アルコール五〇％、冷蔵庫六七％、洗濯機三九％。年間インフレ率は一〇〇％に達すると予測される。ビドゴシチ、トルン、スタロヴァ・ヴォラなどで市電、バス、清掃業などのストが発生。八〇～一〇〇％の賃上げで解決。

七月八日

◆ブカレストで開かれたワルシャワ条約機構政治諮問委員会（首脳会議）がコミュニケを発表：「社会主義に普遍的なモデルはなく、何人も真理の独占権をもたない。新しい社会の建設は創造的な過程であって、各々の国でその条件、伝統、必要に応じて行なわれる。・・・加盟国の間の関係を、平等、独立、そしてどの加盟国も自身の政治的路線、戦略・戦術を外からの介入なしに、自立的に策定する権利をもつという原則のもとに発展させなければならない。」七月二一日にハンガリーのソモギ外務次官が語ったところでは、これはブレジネフ・ドクトリンの無効を宣言したもの。

◆ホーネカー東独議長は胆嚢の病気のためブカレストから急遽帰国。

七月九日

◆米大統領ブッシュ来訪（～一一日）。ヤルゼルスキ、ワレサなど重要人物と会談。ワレサは一〇〇億ドルの投資への期待を表明。ブッシュ大統領はポーランドの改革を賞賛し、経済援助を約束。しかし、主要な力点は自助にあり、ポーランド側を失望させた。主な内容は、①サミットで協調的行動計画を打ち出す。②民営企業を活性化するために一億ドルの基金を設置する。③世銀に三億二五〇〇万ドルの融資を要請する。④五年間の債務繰り延べを提案する（これは今年だけでも五〇億ドルの返済猶予にあたる）。⑤クラクフ市の公害対策のため一五〇〇万ドルの資金援助を行なう。⑥相互に文化・情報センターを開設する。

七月一三日

◆ヤルゼルスキがサミット開催国のミッテラン仏大統領に緊急援助を訴えていたことが明らかにされる。①食糧事情改善のために向こう二年間に合計二〇億ドルの援助、②産業構造の近代化のためにIMFから一九九二年までに約二〇億ドルの緊急融資、など六項目からなり、「短期間

に目下の経済状況に対処できなければ、政治・経済情勢が行き詰まる」と訴える。

◆ミフニク、ソ連科学アカデミー世界経済国際関係研究所の招きで訪ソ。

七月一五日

◆西側サミット、ポーランドとハンガリーへの経済援助で合意（政治宣言）。日本外務省・通産省担当官は一四〇〇億円の貿易保険の焦げ付き解消が先決と指摘。

七月一四日

◆ワレサ、ヤルゼルスキが大統領に選出されたらこれと協力と表明。

七月一六日

◆ソ連平和擁護委員会の機関誌『二〇世紀と平和（Vek 20 i mir）』に発表されたアンドレイ・フェージンの論文「ポーランドのコラージュ」は、一九八一年暮にソ連が軍事介入の準備をしていたことを示唆する。

七月一七日

◆ポーランドとバチカンが外交関係の回復決定を発表。

◆ポーランド国民議会（上下院合同集会）の召集を発表。

◆国家評議会議長諮問会議（八六年一二月設立）が最後の（第一二回）会合を開き、解散。

◆EC外相理事会、サミットの政治宣言を受けて、ポーランド、ハンガリーに対する関係国支援会議開催を決定。

七月一八日

◆A・ミフニク、『ルモンド』紙にワレサが年内にも訪ソし、ゴルバチョフ書記長と会談しようと語る。

七月一九日

◆国民議会でヤルゼルスキを唯一の候補者とする大統領選挙で、投票総数五四四、無効七、賛成二七〇、反対二三三、棄権三四で当選（賛成票が当選に必要な五〇%、すなわち二六八・五票をわずかに上回る）。記名投票としたが、それでも与党連合から反対票が出る。ヤルゼルスキはただちに就任宣誓を行なう。のちに「連帯」側の機関誌『選挙新聞』が公にしたところでは、「連帯」系の一人が賛成、一八人が棄権、七人が故意に無効票を投じ、一一人が投票の際、投票場を出ることによってヤルゼルスキのスレスレ当選を助けた。

◆EC、二年で一億ドル余の対ポーランド食糧援助を決定。

◆ポーランドと西側銀行団、二億ドルの債務繰り延べ合意。

七月二一日

◆ゲレメク、「連帯」が首班をなす内閣を示唆。

七月二三日

◆ソ連共産党中央委員会国際部長V・ファーリンは、西ドイツのテレビに登場し、独ソ不可侵条約に付属秘密議定書が存在したことには疑いの余地がない、と言明。

七月二五日

◆ワレサ、ヤルゼルスキに「連帯」が首班をなす内閣（首相、内相、国防相）を要求、もしこの要求がいれられなければ「連帯」は野党にとどまると語る。ヤルゼルスキは明確な回答を避けたが、副首相を含む経済関係のポストを「連帯」に譲る用意ありと語る。

◆A・ミフニク、プラチスラヴァでドゥプチェク（プラハの春の時代のチェコスロヴァキア共産党書記長）と会見。

七月二八日

◆党中総（～二九日）で、バカ政治局員兼書記がラコフスキ首相の価格自由化政策を「ナイーヴな、素人の経済政策」、「準備不足で実施すれば大混乱を招く」と激しく批判、辞職を申し出た。バカ政治局員は有力な首相候補の一人。

七月二九日

◆党一三中総後半部で、ヤルゼルスキが第一書記、政治局員、中央委員などすべての党職を辞任、ラコフスキが第一書記に就任。選挙敗北の責任をとってチョセク、ミョドヴィチ（全国労組協議会議長）が辞任。これに対してラコフスキを批判したバカは政治局にとどまり（書記は辞任）、保守派と見られるゴリボダ、クバシェヴィチらが政治局入り。

◆キシチャク内相を首相の後任に推薦することを決定。ヤルゼルスキは当初首相候補としてまずW・バカ党政治局員を、ついでR・マリノフスキ統一農民党党首を考えたが、両者が大連合の成立可能性少なしとみて辞退したため、キシチャクに落ちつく。

【八月】

◆八月一日付けで食料品価格をパンや脱脂粉乳などごく一部を除きほぼ全面的に統制解除することを決定。食肉配給券も廃止。

◆国会は賃金の物価スライド制を決定。今年一月にさかのぼり、物価上昇率の八〇%を限度に三ヶ月に一度賃上げを認める。

八月一日

◆旭硝子がサンドメシ市に板ガラス工場を建設することを決定。日本企業としては初めての合弁の試み。投資総額は一五〇億円にのぼる見込み。一九九〇年代前半に完成の予定。目下企業化調査中。進出が予定されているダイハツに乗用車用ガラスを供給したいとしている。ただし、途上国の民間企業育成に取り組む国際金融公社（IFC）が出資することが大前提。

◆ゴルバチョフソ連最高会議議長、西側は東欧諸国の改革を利用して社会主義体制から離脱させようと図ってはならないと警告。

◆ブリュッセルで開かれている西側二四カ国のポーランド・ハンガリー支援国際会議は、①分野別の作業部会を設置、②九月一日までに参加国

が支援の現状と今後のあり方についての報告書を提出し、一〇月前半に第二回会合を開いて具体的計画を決定、などで合意し閉会した。
◆市民議会クラブの動議に基づいて、国会にラコフスキ政府の失政問題を調査する特別委員会を設置し、その結果に基づいて国家法廷を招集し、担当大臣の責任を追求することを決定。この日、ラコフスキ首相は心臓病で再び入院し、国会を欠席。
◆食糧品の市場化によって、一部の品は一ヶ月間に二〇〇～三〇〇％も値上がり。
八月二日
◆国会、キシチャクを首相に選出。賛成二三七、反対一七三、棄権一〇、欠席四〇。与党連合議員が一部反対に回ったが、過半数（二一一）を確保した。①食糧輸出をやめて国内市場に回し、軍、内務省の予算を節約して経済、市場の安定を図る。②官僚制、独占体制を打破し、国営企業の民営化を図る。③円卓会議の合意に基づき、民主化をさらに進める、などの政策を打ち出す。
八月三日
◆ラトビア共和国共産党書記I・ケズベルス（I. Kezbers）がラトビア共和国最高会議で言明したところによれば、人民代表会議に設けられた独ソ不可侵条約問題委員会は、中間的な結論として、「リッベントロップ＝モロトフ協定には付属秘密議定書が添付されており、それは西独外務省文書館に保存されている写しと同じものである」ことを一義的に確認した。委員会はさらに、秘密議定書に含まれているエストニア、リトアニア、ラトビアに関する申し合わせはこれら諸国の主権の侵害であり、その独立にとって直接の脅威であること、議定書は当時の国際法の規範に反していることなどを確認した。委員会の最終報告は一〇月に提出され、それに基づいてさらに一九三九－四一年にバルト諸国で起きた諸事件を調査する特別委員会が設置される予定である。
八月六日
◆ソ連紙『ソヴェツカヤ・ロシヤ』は独ソ不可侵条約問題について長大な論文を掲げ、同条約を非合法と認めた場合、「自動的にソ連の西部国境線を条約が締結された一九三九年八月二三日当時の状態に戻す必要が生じ、ソ連はバルト三国、ウクライナ、白ロシアの西部、北ブコヴィナ、モルダヴィア、レニングラード州の北部、カレリア自治共和国一部を失う」と述べて、ソ連が蒙る損失の大きさを強調、間接的ながら「非合法判定は不可能」との立場を明確にした。
八月七日
◆ワレサ、突如与党連合に加わっている統一農民党、民主党に連立を呼びかけ。これはワレサの単独行動で、市民議会クラブ（「連帯」派議員組織）との事前協議がなかった。
八月九日
◆いったんワレサの連立呼びかけを断わった統一農民党議員団長ベントコフスキは、市民議会クラブと共同歩調をとり、新内閣を不信任することも考えられると述べる。市民議会クラブでゲレメク、モゼレフスキ、ブガイ（Ryszard Bugaj）、コジョウ（Lech Koziol）らがワレサの単独行動を批判。また、統一農民党と対立関係にある農民「連帯」関係の議員がワレサを激しく非難。「連帯」労組全国執行委員会は、市民議会クラブが統一農民党、民主党との連立で政府を樹立するよう求めるとの緊急声明を出す。
八月一〇日
◆市民議会クラブ議長ゲレメクと下院議員ミフニクは、イタリアの保養地で法王ヨハネ＝パウロ二世に謁見する。
八月一一日
◆グダンスクで数千人の労働者が賃上げと工場管理に対する共産党の介入をやめるように求めて一時間の時限ストを実施した。ただし、レーニン造船所の労働者は米国の慈善家が倒産を救うために投資しようとしている緊急援助が打ち切られることを恐れて、スト要求を支持したものの合流しなかった。
◆ポーランド上院は一九六八年のチェコスロバキア介入について全会一致で非難決議を採択した。
◆ソ連共産党機関誌『プラウダ』は、一九三九年の独ソ不可侵条約に秘密議定書が存在することを認める専門家らの見解を掲載した。国家と法研究所のシュレルソン国際法部長は同議定書はバルト諸国などの国家主権を侵したもので、違法と指摘した。外務省のコワリョフ外交史局長はバルト諸国などの併合はナチス・ドイツから保護するための措置だったと判断できるとしながらも、議定書の存在を認めた。
八月一四日
◆キシチャク新政府首班は「連帯」の反対で組閣を断念し、マリノフスキ統一農民党総裁を新首班に指名するようヤルゼルスキ大統領に進言すると声明。
◆ソ連紙『プラウダ』は、共産党を排除した在野勢力主導の政府樹立を呼びかけたワレサをはじめて批判した。
八月一五日
◆ヤルゼルスキ大統領は混乱する政局、経済情勢を収拾しるために各界の代表者による緊急会議をできるだけ早く招集すると声明。
◆市民議会クラブが統一農民党、民主党と組んで政府を構成し、共産党からは内務、外務、国防の三相が加わるという新政権構想が浮上、ワレサの名代として統一農民党、民主党

と折衝したカチンスキ上院議員は一五日にほぼ合意が成立したと語る。首相候補にはゲレメク、ワレサの名前が取沙汰されているが、ゲレメクはイタリア外遊中にワレサ主導で話が進められたことから消極的と見られる。共産党内の若手には構想を支持する声がある。

◆八月中旬の物価を半年前と比べると、パン七・六倍、小麦二・八倍、砂糖六・六倍、牛乳七・八倍、豚肉六・七倍、牛肉一〇・七倍、ガソリン二・九倍、家賃二・一倍（丸紅調べ）。

八月一六日

◆市民議会クラブ、統一農民党、民主党三派は連立政府樹立の方針を決定。ワレサ議長自身は、自分は首相にならない、適任者はほかにいると述べる。三派は下院（四六〇議席）で二六四議席を占めており、ヤルゼルスキ大統領としては国会の解散、戒厳令の導入などの非常措置に訴える以外には多数派の提案する政府を拒むことができない。ワレサは、①共産党に国防、内務二省をゆだねる、②ワルシャワ条約機構加盟国としての立場を守る、という態度を明らかにした。

◆ソ連外務省情報局第一次長グレミツキフは、ワレサ発言を評価する見解を発表、事実上「連帯」主導の政権発足に青信号を出した。タス通信は論評なしにワルシャワの情勢を伝える。

◆ラコフスキ共産党第一書記は共産党国会議員団との会合の席上、ワレサ議長の急進的な奪権路線は円卓会議の合意侵犯であると非難。

◆ヤルゼルスキ大統領はグレンプ首座大司教と会見。グレンプ首座大司教はこのあとソ連大使と会見。

八月一七日

◆午後一時にワレサ「連帯」議長、マリノフスキ統一農民党党首、ユジヴャク民主党党首が連立について合意、午後三時にヤルゼルスキ大統領と会見し、合意の内容を伝える。ワレサは国会に議席をもつすべての改革支持勢力の参加する挙国一致連立政府の樹立が必要であると語る。首相候補としてB・ゲレメク、J・クーロン、T・マゾヴェッキの三人を示唆した模様。ヤルゼルスキはこの案を受託し、近日中に新政府首班を指名する予定。

◆統一労働者党議員団の総会は「連帯」首班内閣に協力すると表明。それまで強硬な姿勢をとっていたラコフスキ第一書記も同意。

八月一八日

◆ヤルゼルスキ大統領は『週間連帯』編集長T・マゾヴェッキ（六二才）と会談し、新政権の首班を要請した。マゾヴェッキはこれを受託。

◆ソ連共産党政治局員で、最高会議独ソ不可侵条約問題特別委員会委員長のA・ヤコヴレフは、『プラウダ』紙とのインタビューで、秘密議定書の原本は見つかっていないものの存在したことに疑問を挟む余地はない。それは共謀による協定で法的な文書とみなすことはできない。ただし、今日のバルト三国の法的、政治的地位は独ソ不可侵条約によってできたのではなく、別の情勢の結果として生じたものだと言明。

八月一九日

◆統一労働者党一四中総、原則的に「連帯」首班内閣への協力姿勢を確認。ただし国防相、内相のほかに副首相、外相、法相、ラジオテレビ委員会議長も要求することを示唆した。

◆ヤルゼルスキ大統領は正式にマゾヴェッキを首相に指名。

◆ポーランド下院も一九六八年のチェコスロバキア介入非難決議。共産党議員も合流。

◆ワレサ、「ポーランド社会が自由と民主主義の原則に基づく政府をもつ可能性が出てきたいま、私の生涯の闘争は終わったように思う」と語る（引退示唆？）。

八月二〇日

◆統一労働者党は新政府の政策と構成について事前に取り決めを結ぶことを求め、またワルシャワ条約機構だけではなくコメコンの忠実な加盟国としてとどまることを要求。

◆ソ連政府機関紙『イズヴェスチア』は、統一労働者党について「指導的な党でなくなった。一種の野党になったということは自らを再建し、国民に魅力ある新しい政策をつくり出さなければならないということだ」と述べ、首相に予定されているマゾヴェッキについて「バランス感覚に優れ、問題をよく理解し、合理的妥協ができる人物」と評価した。

◆ルーマニア共産党機関紙『スキンティア』は、マゾヴェッキの首相指名はポーランド国民と社会主義全般の利益に反すると論評。同紙によれば、新しく首相に予定された人物は反社会主義者で、帝国主義者や反動分子と結びつきをもっている。

◆「連帯」スポークスマン、オニシケヴィチは向こう三年間に少なくとも一〇〇億ドルの西側援助が必要だと述べる。

八月二一日

◆統一農民党幹部会員A・ウーチャクは北海道新聞とのインタビューに答え、非共産党政権づくりをソ連の了解を得てやっている、一種のフィンランド化だと言明。

◆ソ連外務省情報局第一次長グレミツキフは、政権樹立はポーランドの内政問題としながらも、隣国として無関心ではいられないと述べる。

◆ソ連共産党中央委員会国際部長ファーリンが『イズヴェスチア』紙との対談で、第二次大戦後の東欧国境は合法であり、国境線の変更は新たな戦争を引き起こすことになると警告、分離独立を認めるバルト三国の

民族主義運動を批判した。

八月二二日

◆ラコフスキ統一労働者党第一書記は、ゴルバチョフソ連共産党書記長と四〇分間の「電話会談」を行ない、共産党抜きにポーランドの問題解決は不可能だとの立場で一致した。

八月二三日

◆ブッシュ米大統領はソ連のゴルバチョフ最高会議議長がポーランド共産党に対して「連帯」主導の新内閣に参加するよう促したとの報道について「きわめて建設的だ」と述べ、議長の対ポーランド姿勢を高く評価した。

◆ポーランド下院は全会一致で独ソ不可侵条約の無効を宣言する声明を採択した。

◆統一労働者党の一部議員が党の指導的役割を保証した憲法第一章第三条第一項を廃止する提案を提出。

◆チェコスロバキア共産党機関紙『ルデ・プラヴォ』は、マゾヴェッキの首相指名を「社会主義を棺桶に入れて釘づけするもの」と呼ぶ。

◆グダンスクの「連帯」本部を訪れた衆議院外務委員会東欧視察団（団長、相沢英之外務委員長）は、ワレサ委員長と会見、経済援助の一例として日本の銀行が合弁でポーランドに銀行を設立、国民の「タンス預金」吸収を進めてほしいと要請した。

八月二四日

◆ポーランド国会はこの日午後マゾヴェッキを新首相として承認した。賛成三七八、反対四、棄権四一、欠席三七。新首相は国民に忍耐を、西側に「溺れ死ぬ前に助けを」と訴える。

◆マゾヴェッキ（Tadeusz Mazowiecki）の略歴：一九二七年四月一八日にプウォツクで生まれる。ワルシャワ大学法学部卒業。ＰＡＸ協会の活動家、『ヴロツワフ・カトリック週報』編集長。ＰＡＸ議長Ｂ・ピャセツキに反抗して一九五四年に『週報』を追放される（ピャセツキは戦前、ファシスム運動の指導者）。一九五五年に仲間とともにＰＡＸから除名。一九五六年にワルシャワ・カトリック知識人クラブ（ＫＩＫ）を創設、その多年にわたる幹部メンバー、現在副議長。月刊誌『絆（Wiez）』の創刊者の一人、一九五八～八一年その編集長。カトリック知識人の意識改革に大きな役割を果たす。『ズナク』運動の活動家。一九六一～七二年国会議員、三月事件に際して『ズナク』会派の誓願書の起草者。一九七一年に国会議員として一二月事件の国会調査委員会を作ろうとして成功せず。一九七六年に憲法改正反対運動の署名者。一九七七年にワルシャワの聖マルコ教会でハンガーストライキを行なった労働者擁護委員会（コール）のメンバーやシンパサイザーの世話人。一九七八年に学術研修協会（ＴＫＮ）の宣言署名者の一人で、その綱領委員会のメンバー。

一九八〇年八月にグダンスクに赴き、工場間ストライキ委員会（ＭＫＳ）の専門家委員会の議長、労働組合複数主義に関する協定の交渉者となる。一九八〇年から「連帯」労組の顧問。一九八一年から『週間連帯』編集長。今年六月に再刊されたのち再びその編集長。戒厳令で一九八一年一二月一三日から一九八二年一二月二四日まで拘禁される。釈放後ワレサに協力。一九八七年から「連帯」全国執行委員会の顧問。一九八八年のストライキの際、再びバルト海沿岸都市に赴く。「連帯」労組議長付き市民委員会のメンバー。円卓会議の提唱者の一人で、その労組複数主義問題委員会の議長、野党側交渉グループの活動調整者。

著作として『分かれ道と価値』、『もっとも単純な問いかけへの復帰』、『拘禁』、共著として『キリスト者と人権』、『森の人々』などがある。ポーランド・ペンクラブのメンバー、アンジェイ・ストルク賞を受賞。妻に先立たれて目下一人暮らし。三人の息子、四人の孫。

◆ソ連外務省情報局第一次長グレミツキフは、新首相は「両国関係におけるわれわれのパートナー」とコメント。

八月二六日

◆ポーランド鉄鋼労組はワレサ委員長の呼びかけに応え、半年間ストを行なわないことを決定。しかし、グダンスク地域議長ボルシェヴィチはスト権を留保。全国労組協議会（ＯＰＺＺ）もスト・モラトリウムに反対。

◆首座大司教グレンプはチェンストホヴァで、オシフェンチム（アウシュヴィッツ）強制収容所跡地に設けられたカルメル修道団礼拝堂の件で、反セム主義と受けとられかねない説教を行なう。国内では評判を呼んだが、欧米各国で大きな批判を浴びる。マゾヴェッキ政府は中立を守ったが、「連帯」機関紙『選挙新聞』は正面からグレンプを批判し、ワレサも間接的に批判した。

◆ソ連共産党中央委員会はバルト三国の分離要求に対して「このままではバルト三国の運命は重大な危険にさらされる」と警告声明。

八月二七日

◆マゾヴェッキ新首相は、ソ連のクリュチコフＫＧＢ議長と一時間にわたって会見。

◆ワレサ委員長、「少なくとも六ヶ月から一年の間に国民の信頼を確保できよう」、新首相が経済危機の克服に国民の協力が得られるかどうかは今後一年間の政権運営にかかっていると語る。

◆アルバニアがポーランドの新政権はブルジョア反革命と非難。

八月二八日

◆西独大統領ヴァイツゼッカーは、

第二次大戦勃発五〇周年記念日を前にしてポーランドのヤルゼルスキ大統領に書簡を送り、「欧州の心臓部に生きる」両国がともに欧州の平和のために尽くそうと呼びかける。これは同大統領が記念日当日にポーランドを訪問してドイツの戦争責任を明らかにする予定だったが、保守派の反対で実現できなかったため代わりに送ったもの。西独は将来とも現状に異論を述べることはないと確約し、ポーランドの経済再建への協力を約束。

八月二九日

◆ポーランド新政府の組閣が第二次大戦勃発五〇周年記念行事などで九月四日以降にずれ込む。ゲレメク市民議会クラブ会長は外相ポストを共産党か農民党に譲ってもよいと述べる。

◆共産党議員団議長オジェホフスキ、統一労働者党の名称を社会主義労働者党に改めることを提案。

八月三〇日

◆市民議会クラブのゲレメク会長は経済関係のポストも共産党に譲るべきだと提案。

八月三一日

◆この日、新聞に発表された調査によれば、一九八八年のポーランドの平均週間実労働時間は三三・八時間。前年に比べて〇・三時間の伸び。しかし、おそらくなお世界最短の実労働時間と思われる。

【九月】

九月一日

◆ポーランド、第二次大戦勃発五〇周年記念日を迎える。各種の行事。

九月五日

◆ワレサ委員長、西独訪問（～八日）

九月六日

◆ソ連外務省情報局第一次長ペルフィリエフによれば、昨年永住目的で出国したソ連人は一〇万八〇〇〇人、うち、イスラエルへ三万人、西独へ五万一〇〇〇人。今年は年半ばですでに一〇万人を越しているという。

◆ソ連科学アカデミー社会主義体制経済研究所のV・ダシチェフ国際関係部長は共同通信とのインタビューで、「ソ連は東欧諸国の制限主権論（ブレジネフ・ドクトリン）を完全に放棄した」と述べるとともに、これに代わってソ連＝東欧関係の新しい原則として、内政不干渉、不介入を柱とする「ゴルバチョフ・ドクトリン」を確立すべきであるとの考えを示した。同氏は体制選択の自由、ワルシャワ条約機構からの脱退も認める用意を示した。

九月七日

◆夜、マゾヴェッキ首相がコザケヴィチ下院議長に閣僚候補者名簿を提出。二一ポストのうち、市民議会クラブ（「連帯」）は外務、大蔵など政治経済の主要閣僚を含む一一（バルツェロヴィチ大蔵相、クーロン労働・社会政策相、パシンスキ地域経済・建設相、サムソノヴィチ教育相、シリィチク産業相、ハル院外団体担当無任所相など）、統一労働者党（共産党）は内務、国防など四（キシチャク内相、シヴィッキ国防相など）、統一農民党は四（ヤニッキ農業・食品経済相、ベントコフスキ法相など）、民主党は三（マッテヴィチ国内市場相など）、無所属は一（スクビシェフスキ外相）をそれぞれ獲得。二、三のポストはなお交渉中。

◆ソ連リトアニア共和国で、ポーランド系住民が多数を占めるサルチニンカイ地区のソビエトが自治区創設を決議した。

九月八日

◆マゾヴェッキ首相が未定ポストの候補も提出。ヤルゼルスキ大統領はこれとは別にW・バカ党政治局員を国立銀行総裁に推薦。国会で閣僚候補者の公聴会が始まる。

◆スクビシェフキ外相候補（科学アカデミー国家と法研究所ポズナン支部教授、国際法専攻、ポーランド＝西独関係で業績、グレンプ首座大司教の外交問題顧問）は下院外交委員会で証言し、東側の一員であることに変わりはないものの、「独立と主権、国益に基づく、イデオロギーにとらわれない外交」を表明、「外務省を特定の政党が支配してきた現状を打破する」と宣言した。現在ポーランドの在外公館には共産党の政治委員会が配置されているが、同氏は「これをなくするのに全力を挙げる」と述べた。また、ドイツ再統一問題についても触れ、両ドイツ、四大国、全欧州の合意があれば、有り得ないことではないと述べた。ソ連に対しては、第二次大戦中にソ連に連れ去られた同胞への補償問題を提起し、ソ連に持ち去られた文化財について返還を求め、ソ連残留ポーランド人の帰国実現に努力する方針を示した。シヴィッキ国防相は下院国防委員会で証言し、軍隊を国民の弾圧に使わないと声明させられる。外相ほか主要閣僚候補は信任されたが、統一農民党のヤニッキ副首相兼農業・食品経済相候補、農民「連帯」のハル無任所相候補がいずれも一九対二一票で信任されなかった。

◆ポーランドの党機関紙『トリブナ・ルドゥ』が伝えたところによると、全国労組協議会（OPZZ）は「統一労働者党はもはや勤労者の利害の保障者ではない」と述べて、党に決別宣言をした。OPZZは、①インフレと物不足を一段と悪化させた一連の経済政策、②「連帯」の首相を登場させ、「混乱」を招きつつある政治的な決定の両方で「党は労働者の利益に反した」と非難、「連帯」内のワレサ反対派に提携を呼びかけている。

◆欧州通常戦力交渉（CFE）の第三回交渉がウィーンのホーフブルク

宮殿で始まり、ソ連東欧諸国側は「一九九〇年までに妥結の用意がある」と声明した。これはNATO側が今年の五月の首脳会談で半年ないし一年以内の合意を期待すると表明したのに対し、正式交渉の場で早期妥結に応ずる姿勢を示したもの。

九月九日

◆マゾヴェッキ首相は公聴会で不信任の二閣僚も含めて一二日の下院本会議で一括信任を求める方針を明らかにする。

◆シヴィッキ国防相は国会国防委員会の公聴会で、一九六八年のチェコスロヴァキアへの軍事介入について、「今日からみると誤りだった。ほかに解決方法があったと思う」と述べた。

九月一〇日

◆ハンガリー国営のMTI通信は西独行きを希望してハンガリーに約六五〇〇人の東独市民に対して、ハンガリー政府は一一日午前零時から自由に出国させることを決めた、と伝えた。一方、ハンガリー政府は一〇日夕、コミニュケを発表し「東独市民が出国できるように、東独との査証協定の効力を停止した」と述べた。ハンガリーにはこのほかに六万人の東独市民が滞在しており、出国者はさらに増える見込み。コール西独首相はこの決定を「人道主義の精神と欧州の連帯に基づく決定」と賞賛。東独政府はこの日夜、国営のADN通信を通じてハンガリーの決定を国際間の協定に違反した「組織的な人身売買と内政干渉」と厳しく非難した。

九月一一日

◆キシチャク内相は「連帯」の『選挙新聞』のインタビューに応え、現在の国防省、内務省の顔ぶれからすると、将来の「連帯」政府に対してクーデタの可能性はない、と語る。

◆ブダペスト放送は、過去二四時間に一万六〇〇〇人の東独市民が新たにチェコスロバキアから到着し、さらにルーマニアとブルガリアからも多数到着するものと見られる、と伝える。

九月一二日

◆ポーランド下院でマゾヴェッキ新内閣が賛成四〇二、反対なし、棄権一三の圧倒的支持で承認される。バカ国立銀行総裁も承認される。

◆これに先立ち、同首相は施政方針演説を行ない、一、行政をイデオロギーと教会の双方から切り離す。ただし、宗教が個人の行動を動機づける上で重要な役割を果たすことを認識する。次代の支柱となる若者が、イデオロギーの束縛を離れて自由に活動できるようにする、と宣言。二、政府機構の大幅な変更、公務員の入れ替えは考えない。政府に忠実かどうかで人事を決定する、と保証、ただし、内務省は民主化が必要、警察は法と裁判所にのみ従う、と強調。三、報道政策について、政府は国民に真実を述べる。報道機関が特定の政治団体に利用されてはならない、と指摘。三、外交政策については「既存の国際条約をすべて尊重する」と述べたが、ソ連との関係について「共通のイデオロギーではなく、主権と平等の原則に基づく。より重要な基盤は両国民の友好関係だ」と語る。四、経済政策について「西側スタイルの典型的な市場経済」を目標に掲げ、具体的な再建策として、①すべての補助金のカット、②国による新たな投資の凍結、③税の厳正な徴収、④軍事産業の民需部門への転用、⑤通貨供給量の制限などを挙げた。また、交換レートの二本立てをズロチの切り下げで一本化することを約束した。さらに、税制改正で個人所得税を新設する方針を打ち出した。「当面は生産が落ちざるを得ない」と述べ、国民に忍耐を求めた。五、自治体政策について、地方選挙を早めて実施し、市民の活力を地方行政に反映させるようにする、と述べる。六、労組との関係について、自由な労組と協力する。政府の決定を労組も理解するよう期待する、と訴える。

◆マゾヴェッキ首相は演説の途中で気分が悪くなり、四〇分ほど中断。健康に異常はないが、連日、三～四時間の睡眠しかとらない猛烈スケジュールのため過労に陥ったと見られる。

九月一三日

◆ポーランド共産党のラコフスキ第一書記は、テレビで「マゾヴェッキ首相の政策は妥当であり、党はこの政府を支える義務がある」と訴える。また、党内改革派を中心とする新党の結成を呼びかける。同第一書記は、四年後に予定される完全自由選挙に向けて「思い切った政治基盤の拡大を図り、ポーランド左翼を結集した大政党の建設に着手しよう」、この政党は「時代遅れと非寛容の精神にまみれた保守的かつ視野の狭い民族主義的傾向に対抗する重石となる」と述べた。

◆ワルシャワの西独大使館にこの日までに約五〇人の東独市民が駆け込んでいることが明らかとなった。

◆ワルシャワ条約機構は東独難民問題を討議するため緊急に外務次官会議をモスクワに招集。「相互理解と建設的協調の雰囲気」で討議し、「討議した諸問題に関して具体的行動をとる」ことで合意して、一日で終了。

九月一四日

◆ポーランドの国営自動車製造工場（FSO）のオレニャク企業長は朝日新聞の記者と会見し、「イタリアのフィアットとの小型乗用車生産計画を白紙還元し、一千CC以上の中・大型乗用車生産を西側からの技術援助によって行なう方針である」と

述べた。現在ダイハツ、フィアット、フォルクスワーゲン、ルノーなどから六計画が提出されており、ダイハツ＝三井グループがもっとも有力とされるが、総額一千億円を越すプロジェクトだけに日本政府の信用供与が実現できるかが契約締結を大きく左右する見込み。オレニャク氏は「フィアット社との合弁はＦＳＯではなく、南部の小型自動車工場（ＦＳＭ）だけで行なう」と言明。

九月一五日

◆ポーランドではマゾヴェッキ内閣の報道官にマウゴジャータ・ニェザビトフスカ女史が任命された。女史は『週間連帯』の新聞記者出身。

九月一七日

◆ソ連がポーランドに侵攻してから五〇年目にあたるこの日、ワルシャワで約一〇〇〇人が抗議の集会やデモを行ない、党機関誌『トリブナ・ルドゥ』も一六日、はじめてソ連の侵攻を非難する社説を掲げた。

◆ソ連ウクライナ共和国西部の都市リヴォフでこの日、弾圧に抗議する数万の東方帰一教会信者の集会が行なわれた。集会はさらに一九三九年の西ウクライナ併合に抗議する十万人以上のデモへと合流した。

北海道ポーランド文化協会

創立２周年記念　第９回例会—ハープシコード・リサイタル

エリザベータ　ステファンスカ＝ルコビッツ

●プロフィール　高名なピアニスト、ハリーナ・チェルニー＝ステファンスカを母として生まれ、幼少よりすぐれた才能をあらわし、十一才の時、ワルシャワフィルと共演。ポーランド国内、ベルリン、ケルン、ワイマール、ウイーン、リンツに演奏旅行。父、ステファンスキー教授に師事。ベルリンではハープシコードをハンス・ピュッナー教授に師事。一九六四年、ジュネーブ国際コンクールに第一位優勝、世界各国の主要都市に招かれ高い評価を得ている。

【日　時】　一九八九年十一月六日（月）
　　午後六時三十分開演

【場　所】　ザ・ルーテルホール
　　（札幌市中央区大通西六丁目）

【曲　目】　C・バルバストル　ラ・スザンヌ
　　ラ・マルシェルブ
　　F・クープラン　第二十五組曲
　　G・F・ヘンデル　シャコンヌ　ト短調
　　J・S・バッハ　パルティータ　ハ短調
　　D・スカルラッティ　二つのソナタ
　　W・A・モーツアルト　ロンド　二長調
　　C・P・H・E・バッハ　ラ・フォリオ

【入場券】　三千五百円（市内プレイガイド発売）

【主　催】　北海道ポーランド文化協会

【後　援】　日本ショパン協会ポーランド支部

POLE 第 9 号（1989.11.2）目次

第 3 回総会（1989.10.16）報告…… 1
ポーランド・日本協会の「日本週間」プログラム、1989 年役員名簿…… 2
伊東孝之「ポーランド・クロニクル 1989.6～9」…… 3
ポ文協創立 2 周年記念エリザベータ・ステフアンスカ・ハープシコード・リサイタル（1989.11.6）のお知らせ 10